

あのまち このまち <68>

ラダックとザンスカール

長岡 正利

図-1 ラダック周辺の衛星画像図、上部がインダス河、その右がレー、左はラダックへの最後の峠フォツ・ラ。中央はザンスカール川 (Olizane, 1:350,000 Ladakh Zanskar, 約10分の6に縮小)

ラダックとザンスカールは、インド亜大陸北方のヒマラヤとカラコルム山脈の間の河源近くのインダス河流域にあり、その主邑はそれぞれレーとパダムである。

ラダックとは、チベット語で言う「峰(関嶺)の彼方」の地である。

その語のとおり、周辺のいずれから見ても3000~6000mの関嶺の彼方の、幾つもの峠の向うに孤立した地である。標高は低いところで3500m、気温の年較差50℃・日較差20℃以上、年雨量100mm以下の荒寥・静寂の地であり、遠く氷河の山々を望む。その気候と高度のゆえに、気味の悪いくらいに澄んだ蒼空と強烈な日差しのもとで、僅かばかりの耕地と小さな集落には釣合わないようなチベット仏教(ラマ教)僧院(ゴンパ)が岩山の麓や頂に古城のようなたたずまいを見せている。

これらの地への起点、インド北部のシリナガル(本誌8月号で紹介;本稿はその続きです)からラダックへ至るには、4000m前後の3つの峠を越える2日行程を要する。道は、最初の険しい峠、ゾジ・ラをすぎると風景が一変し、次第に沙漠の様相を見せる。中間地カルギルを過ぎれば、谷間で僅かな水を利用できる土地のほか、山々と大地はことごとく不毛。ヒマラヤ造山運動で隆起・褶曲した地層の異様な色彩を見るのみとなる。また、これ以奥では人々の容貌はモンゴル系となって各所に白亜の仏塔やゴンパが点在するなど、それまでのイスラム文化圏からチベット仏教圏に入る。なお、ザンスカールへは、途中のカルギル

より南へ、ジープでさらに2日を要する。

このように、この地は、地理・文化的にはチベット圏にある。かつてはチベットの一王国であったが、近世以降はインドの一部として長くチベット世界とは分離されてきた。しかし、今日でもなお小チベットと呼ばれているように、かつての文化を保ち続けている。これは、天然の要害と苛酷な自然に守られて、外国の支配が強いものとはなり得なかったためにほかならない。

ラダックとザンスカールでは、1947年のインド・パキスタン独立直後からのカシュミールの帰属をめぐる3回の戦争、東部のアクサイ・チンの領有をめぐる中印紛争等の政治的理由から、紛争地域として長く外界との接触を絶たれてきたため、古くから人々の生活の中に生きていた仏教とその美術一かの地の人々にとっては信仰の対象そのものが1974年の入域解禁によって突然に現代に甦り、伝承されてきた民俗・文化とともに密教系仏教美術研究の面で世界の注目を浴びた。

この付近の地図

インド亜大陸全域の地図の利用については、本誌8月号「シリナガル」の稿で紹介したとおり、米国AMSがかつて作成した25万分1図シリーズ等が利用できる。ほかに、この地方については1987年に作成された衛星画像地図(図-1)があり、等高線はないものの、道路や集落については唯一正確な最新情報として重宝である。

東西交流史の中で

この地は、今でこそ、中印・中パの両国境紛争



図-2 ラダックの中心地レー(図の右)と、その起点シュリーナガル
 図中紫色の点線は印中停戦ライン、破線は印中係争国境 (Bartholomew、
 1:4,000,000 Indian Subcontinent、10分の9に縮小)

期まで中央アジアに広く足跡を残した大谷光瑞の探検隊の一部と明治末の日野陸軍少佐の踏査行位のものである。

王朝の興亡と現在

ラダックが吐蕃(チベット)の史書に登場するのは、10世紀末である。もとより、人口希薄の地のゆえに、周辺への大きな勢力は及ぼし得なかったが、15世紀にはナムギャル王のもとで、レーを中心に今に残る多くの寺院が建設されるなどの繁栄を見た。その後、中央アジアからのトルコ系民族の侵入、次いで西のバルチスタンの軍勢の侵寇を受け、王国は崩壊の危機に立たされるものの、16・17世紀には再び全盛をむかえ、ナムギャル王朝は

によって三方の国境を閉ざしたままとなっているが、近世には、ヘディン、スタインらの東トルキスタンへの地理的探検隊も通過し、さらに奥地へと峠を越えていった交易上要衝の地であり、かつてはチベットや新彊へ開かれた国際都市であった。

さかのばれば、インドに生まれ、早くから中国、日本へと伝わっていた仏教は、チベットには7世紀に中国とネパールから伝えられたが、さらに8世紀には当時インドで全盛であった密教がカシュミールとこの地を経てチベットに伝えられ、隆盛を見た。その後、中国、インドと相次いで仏教およびその文化が消滅する中で、奇跡的にこの地に遺った曼荼羅等の図像(写真⑦)はかつてインドにおいて全盛であった大乘仏教の流れを正統的に伝えているものといわれている。

なお、日本とこの地域との歴史的な繋がり・交流は、仏教伝来に関するものを除けば何もない。最近の調査・登山隊を除いて、この地への日本人入域者で知られているのは、明治末期から昭和初

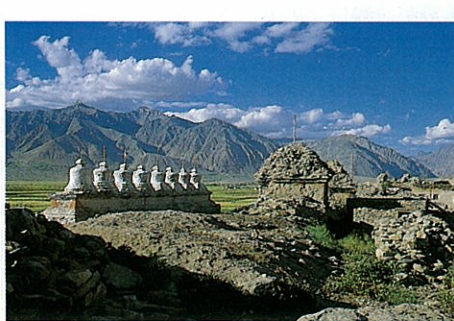
紀には再び全盛をむかえ、ナムギャル王朝は仏教の興隆に努めてチベットとの交易も盛んに行われた。しかし17世紀には、チベット・蒙古、カシュミールの軍勢に蚕蝕され、衰退の道を歩むこととなり、19世紀以降は英国統治下のカシュミール藩王国に併合されて現在に至っている。

このような歴史を経て、ラダックの中心地レーには、市街のどこからも見え、丘の上から町を睥睨するような9層の王宮の廃虚(写真④)が今に残っている。しかし、僻遠の地ザンスカールでは、かつての王国の都邑とは名ばかりに過疎化が進んで、今では日干しレンガの家が数十軒のみとなったパダム(写真⑤)とさらに奥の寒村ザンラにそれぞれナムギャル王家の末裔が住み、今も村人から「王」として遇されている。

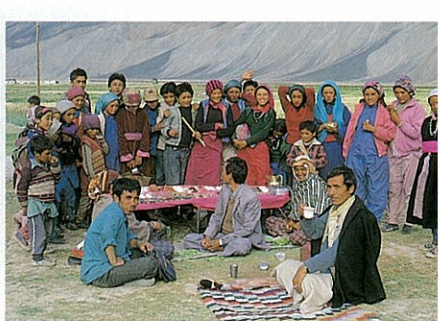
ラダックを世に知らしめ、今も唯一ともいえる観光資源となっているのは、既に述べたとおり、密教系美術の数々が残る僧院(図-1中に点在する*)であるが、その代表は、ラダックで現存最古のアルチ・ゴンパ(11世紀)であり、整然と描かれた精緻な曼荼羅その他の壁画は壮観を極める。ほかに、陸路ラダックに入る際に岩石砂漠のよう



①不毛の大地を縫うラダックへの道



②蒼空と路傍の仏塔(ザンスカールにて)



③たくましく生きる人々(同、路上の行商)



④ラダックの中心地レー、背後の山上は旧王宮



⑤今では見るかげもないザンスカールの中心地バダム、仏塔が点在する土色の街



⑥ラダックで最大のヘミスゴンパ内庭

な山中に見えてくるラマユル・ゴンパレーを過ぎて周辺の無数の仏塔とともに風景との美しい調和を見せるティクセ・ゴンパ、最奥にあつて仮面舞踏を伴う初春の大祭が有名な最大規模のヘミス・ゴンパ(写真⑥)等々。ザンスカールではカルシャその他の僧院がある。

谷間に点在する僧院の壁面には、数多くの曼荼羅を始めとして、朱、青、黄白に彩られた守護尊、護法尊の多くが忿怒の異相をなし、時に明妃を抱く。見るものを呪縛するような画像の数々である。苛酷な自然と風土に生きてきたチベットの人々の内に秘めたる鋭い情緒感による凄ましい限りの創造物であろう。

しかし、村々には、仏の加護と来世を信ずるように穏やかな表情でマニ車(廻す毎に、納めた経文を唱えたことになるという)を手にして真言を唱え続ける老人はいても、修行が続けられている筈の僧院には、ほとんど堂守のような、宗教的気迫・緊張感を感じさせ得ないような僧以外には見あたらず(高僧は主都デリー等に滞在の由)、堂内には異彩異形の諸尊と曼荼羅が、周囲を飾る千仏とともに退色し損傷しながらも、不思議に色鮮やかに、

冷えびえとした空間をなしているのみである。

この地では、夏も終わりに近い頃から風が吹き始め、微細な土沙を巻き上げて視界を閉ざす日が多くなる。やがて、秋ともなると日々に気温は低下して空は澄み渡り、天地に満つる月の光の白い輝きが地上の霜に見まごうような酷寒の夜が訪れる。

峠は雪に閉ざされ、外界から訪れる人も絶える。ほとんど人々に顧みられなくなった僧院の閉ざされた内陣の闇の中では、幾多の仏の、人々の心を見据えるような眼が永遠の命を長らえているのではないかと――。

(国土地理院)

【文献】

- F. de Filippi: "Himalaya, Karakoram and Eastern Turkestan", E. Arnold, 1932.
- HAAJ: 「チベット・ラダック研究」、1973.
- 岩村武二: 「ラダック曼荼羅」、岩波書店、1987.
- O. Follmi: "Zaskar—A Himalayan Kingdom", Thames & Hudson, 1988.



⑦僧院の壁画の教かず、左：護法尊マハカーラ(日本に渡って大黒さま)、中：千体仏の一部、右：別尊曼荼羅

LADAKH/ZANSKAR

1:650000

